

[特集Ⅱ]

第2コース

学ぶ立場から教える立場へ 人間形成の場としての授業(2)

柴田 好章*・内田 良**・山川 法子***
坂本 将暢***・世古 篤****

1. コースの目的と内容
2. 活動の概要
3. 模擬授業への案内 —参入段階／相対化段階／具体化段階—
4. 模擬授業の実践 —設計段階／実施段階—
5. リフレクション
6. まとめと考察 —高校生にとって「教える」を経験する意味—

1. コースの目的と内容

本コースは、学ぶ立場から教える立場へと転換することを通して、受講者が「授業」に関する理解を深めることを目的としている。

受講者（本コースは16名）は、これまでに小学校、中学校、高等学校をとおして、授業というものを「学習者として」経験してきたが、当然ながら「授業者として」の経験はない。本コースでは受講者はまず、「授業」をキーワードにして、学習者としての自身の経験を振り返る。次に、授業を実施するにあたって授業者がおこなっている、授業の設計・実施・評価について、その枠組みを学ぶ。本コースの活動の大きな特徴は、受講者が自ら模擬的な「授業」を組み立てて実施することである。受講者は、授業の基本的なあり方を理解した上で、自分が実施してみたい授業を構想し、それらの構想を持ち寄り、班を形成して、授業に適したテーマを選定する。そのテーマに沿って、さらに具体的に教材や発問等を考案・工夫し、一つの模擬授業を設計し、実施する。スタッフはこの一連の過程において、受講者がこれまでの経験やさらには本コースのなかでの活動や議論を、つねに「振り返る」ことができるよう、いくつかの方法を用いて、活動の内容を記録する。受講者は、それらを反省的に参照することによって、よりよい授業を実現するための手立てについて、考察を

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授

** 日本学術振興会特別研究員

*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程

**** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程

深めていく。

2. 活動の概要

上記の目的を達成するために、本コースでは昨年度の反省を活かしつつ、実施案を練ってきた。しかし、2日目（8月9日）に台風10号が本州に上陸した影響により、全コース共通で2日目午前の活動が中止となった結果、本コースも活動予定の大幅な変更を迫られた。

当初は、「2-1 コースデザイン」に示す案で実施する予定であった。1日目（8月8日）は、終日その予定どおりに活動が進められた。台風が上陸した2日目は、午後から活動が再開された。本コースの目的は3日間の一連の流れに組み込まれているため、2日目午前とその後の活動目的をできるだけ損なわないかたちで、午後以降の活動内容を急遽編成し直した。それが、「2-2 修正後のコースデザイン」であり、2日目午後と3日目（8月10日）終日は、この案に沿って活動がおこなわれた。この間の受講者数は、1日目が16名、2日目が9名、3日目が14名である。本章では、その活動の概要を示す。なお、各活動の詳細については、次章以降にて説明する。

2-1 コースデザイン

本コースの活動は、「模擬授業への案内」とそれに続く「模擬授業の実践」の2つの取り組みに、大きく分けられる。「模擬授業への案内」は、初対面の受講者同士がお互いのことを知るための「参入段階」と、日常的な授業の様子や仕組みについて考察する、授業の「相対化段階」と、授業の実際の運営方法を知る、授業の「具体化段階」の3段階から成る。ここで受講者はお互いの関心を知り、協働をとおして、模擬授業を設計・実施するための基礎的な視角を身につけていく。「模擬授業の実践」は、授業案をつくりだしていく「設計段階」と、実際に自分たちで模擬授業をおこなう「実施段階」の2段階から成る。ここで受講者は各班に分かれて、ひとつのテーマを設定し、授業の内容や構成を考え出して、実際に模擬授業をおこなう。

表1は、当初計画されていたコースデザインである。実際にはこの案のとおり活動したのは1日目だけである。ここでは、表に即して、1日目の具体的な活動（＝「模擬授業への案内」）を示していく。

1日目前半は、参入段階として、オリエンテーションをおこなった。最初にスタッフが、本コースの目的やスケジュールを簡単に説明した。その際には、本コースの日程と概要を、視覚的に一目で把握できるように、パンフレットのかたちにして、各受講者に手渡した。次に各種ペンと画用紙を用いて自由なかたちで名札をつくってもらい、自己紹介をした。そして、名札に書かれた名前を皆がおぼえ、さらに交流の促進、緊張の緩和のために、受講者とスタッフ全員でレクリエーションをおこなった。

1日目後半は、相対化段階と具体化段階にあたる。まず、これまでに各受講者が経験してきた授業を振り返るために、個人作業として受講者各自が、授業から連想される言葉や出来事を手がかりに、イメージマップをスケッチブック上に作成した。個人レベルで授業というものを相対化した後に、次にスタッフの側から、授業者の仕事、とくに授業の設計・実施・評価という仕事について、講義形式で説明をおこなった。次に、受講者4人ずつで4つの小グループをつくり、そのなかで自分の

表 1 コースデザイン

1日目 8月8日(金)	10:40～	a. オリエンテーション a-1・セミナーの目的やスケジュールの説明<授業者> a-2・名札づくり<個人>、自己紹介<集団> a-3・アイスブレイキング<集団> 11:20～ ・休憩 11:30～ a-4・授業概要の説明<授業者> a-5・参加動機を、1人2, 3分で発表<集団> 12:00～ 昼食	5分 15分 25分 5分 10分 20分
<ポイント> 名札づくり、自己紹介、アイスブレイキングで、参加者の心を開くようにする。授業者、TAも、一緒に行い、自己開示のモデリングをする。新たな集団への適応が難しい生徒への配慮をする。			
	13:00～	b. これまでの授業体験を振り返ろう b-1・「授業」のイメージマップ作成について、書き方を説明。昨年の例も示す。 <授業者> 実物投影機(書画カメラ)を利用。 b-2・印象に残っている授業を想起し、イメージマップ作成<個人作業> 授業を中心にして、イメージを広げる。 スケッチブックの1枚の紙を利用し、中心に授業と書き、その周りに、形容詞を思いつくまま書く。さらに、形容詞に対応した、具体例、条件などを書く。 大きめの付箋紙を用意し、各自の意見を書く。 グループで四つ切り画用紙1枚にまとめ上げる。 b-3・発表・討論<小集団> ・休憩 14:00～ 14:10～ b-4・授業者の仕事や、授業の設計・実施・評価という点から捉え、講義する。 (Plan Do See について説明)<授業者> b-5・授業者がなすべき仕事の抽出<小集団> 大きめの付箋紙を用意し、各自の意見をそれを書く。(10分) グループで模造紙1枚にまとめ上げる。b-2で書いたイメージを模造紙に貼り付け、リンクさせる。(30分) 15:00～ ・休憩 15:15～ b-6・発表・討論<集団> b-7・論点の整理<授業者> b-7・模擬授業でしてみたいこと、自分が受けてみたい授業について、考えてもらえるようプリントを渡す。<授業者> 16:00～ 解散	10分 20分 25分 10分 20分 40分 10分 25分 20分 —
<ポイント> b-2では、学習者として授業の負の側面(つまらない、教師が準備しないなど)が出されることが予想される。b-5では、それを授業者側の立場から見直して、授業を行う者の大変さに気づかせていく。			
2日目 8月9日(土)	10:00～	c. 授業者による模擬模擬授業 c-1・授業者による模擬模擬授業<授業者> c-2・模擬模擬授業の解説。パワーポイントを用いる?<授業者> 10:40～ ・休憩 10:50～ d. 授業設計 d-1・模擬授業実施にむけた説明。 他の模擬授業の例もいくつか示す。<授業者> d-2・模擬授業を設計することを念頭において、各自の模擬授業の構想を練り出し、スケッチブックに書き留める(準備物;教科書・教材)。前日の宿題の具体化。<個人> d-3・グループ分けの発表<授業者>	20分 20分 10分 15分 30分 —

		d-4・模擬授業のテーマ選定＜小集団＞ 班ごとに話し合い、模擬授業のテーマを選定する。	25分
12:00～	昼食		
＜ポイント＞ cでは、最終日に受講者が行う模擬授業のイメージをつかませる。			
13:00～		d-5(1)・授業設計＜小集団＞ 付箋紙を用いて、授業案を作成する。	40分
13:40～		・休憩	5分
13:45～		d-5(2)・授業設計＜小集団＞ 付箋紙を用いて、授業案を作成する。	40分
14:25～		・休憩	10分
14:35～		e・模擬授業準備 e-1(1)・授業準備＜小集団＞ 指導案の作成。および、OHPやワークシートなどの作成。	40分
15:15～		・休憩	5分
15:20～		e-1(2)・授業準備＜小集団＞	40分
16:00		解散	
＜ポイント＞ cでは、最終日に受講者が行う模擬授業のイメージをつかませる。 d-2では、TAは、各参加者において模擬授業の構想が順調に進むように働きかける。TAは、各参加者の構想に基づいて、参加者を4人ずつ4つの班にわけ、各班に1名のTAがつくようにする。d-3以降は、各班ごとの作業となる。授業者は、概念を獲得させる、イメージをふくらませる、など、学習者の内的な変化を引き起こされるように、働きかける。教科書や授業の参考図書を豊富に用意しておく。			
3日目 8月10日(日)	10:00～	2日目の作業のつづき； e-1(3)・授業準備＜小集団＞	50分
	10:50～	・休憩	10分
	11:00～	f・模擬授業実施 f-1・グループごとに、20分の模擬授業を行う (準備の時間を含めて各班30分×前半2班)。	60分
	12:00	昼食	
＜ポイント＞ e-1'では、学習者の反応を予想させる。リハーサルを進める。			
	13:00～	30分×後半2班	60分
	14:00～	・休憩	10分
	14:10～	f-2・反省会 f-3・記念撮影、修了書授与	40分 10分
	16:00	解散	
＜ポイント＞教材が、受講者にとって既知の場合は、生徒になったつもりで模擬授業を受けるようにさせる。			

イメージマップについて説明し、各自の意見と講義の内容をもとにして、共同で「授業」のイメージマップを1枚の模造紙の上にまとめあげた。その間、各小集団にはスタッフのなかから一人ずつ担当者が付き、ディスカッションが円滑に進むようアドバイスをしたり、質問に応じたりした。班としての意見を整理するために、各自に付箋紙を渡して、活用した。まとめの成果は、小集団ごとに発表し、他集団の受講者と意見を交換し合った。個人作業による自分自身のレベルでの振り返りに加えて、共同作業による小集団レベルでの振り返り、そして発表による全体のレベルでの振り返りをおとして、普段は日常のなかに埋め込まれていて意識にのぼってこない授業の、そのあり方やそれを設計・実施することの難しさについて理解を進めた。

最後に、スタッフから全員に向けて、2日目以降の簡単なスケジュールを説明し、そのための準備として、宿題を手渡した。これは授業のあり方や設計の仕方について学んだ知識をもとに、各受

講者が、自分はどのような関心からどのような模擬授業をおこないたいのかについて記述してもらうものである。

なお、スタッフの側ではオリエンテーションの時点からすでに、随時、デジタルビデオカメラやデジタルスチルカメラ、ICレコーダ等の機器を用いて活動を記録し、それらの記録をもとに、リフレクション・ボードに適宜、活動内容を掲示していった。受講者は、サマースクールの期間中、機会があるごとにこのリフレクション・ボードをみて、これまでの自分たちの活動を振り返ったり、さらには自ら書き込みをしてお互いの交流を楽しんだりした。

2-2 修正後のコースデザイン

表2は、2日目午前の活動が中止になったために、急遽、本コースの目的や計画をできるだけ損なわないように配慮した上で再編成した日程表である。再編成にあたっては、2日目午後から出席した受講者が9名であり、残りの7名が欠席したことから、その欠席者が再び3日目に参加するときに、作業にできるだけ支障がなく取り組めるように、配慮した。以下に、2日目以降の具体的な活動である「模擬授業の実践」の取り組みを示していく。

表2 修正後のコースデザイン

2日目 8月9日(土)	12:00～	g・教材についての講義<授業者>	45分
		h・授業テーマの決定へ	
		h-1・宿題のプレゼン<個人>	45分
		d-3・グループ分けの発表<授業者>	—
	14:30～	d-4・模擬授業のテーマ選定<小集団>	30分
		班ごとに話し合い、模擬授業のテーマを選定する。	
	15:30～	i・教材研究…P.C. ルームにて、資料の検索<グループ>	60分
	16:00	解散	
<ポイント>			
3日目 8月10日(日)	10:00～	c・授業者による模擬模擬授業	
		c-1・授業者による模擬模擬授業<授業者>	20分
		c-2・模擬模擬授業の解説(パワーポイント)<授業者>	20分
	10:40～	・休憩	5分
	10:45～	d・授業設計	75分
		d-2・模擬授業を設計することを念頭において、各自の模擬授業の構想を練り出し、スケッチブックに書き留める(準備物;教科書・教材)。前日の宿題の具体化。<小集団>	
	12:00～	昼食	
<ポイント>			
	13:00～	e・授業準備<小集団>	60分
	14:00	休憩	10分
	14:10～	f・模擬授業実施	
		f-1・グループごとに、20分の模擬授業を行う	85分
		f-2・反省会	20分
		f-3・記念撮影、修了書授与	5分
	16:00	解散	
<ポイント>			

2日目後半は、模擬授業の設計段階である。まず、スタッフから全員に向けて、3日間の活動のなかでどのような教材が利用できるのかについて講義をした。次に、全体の活動として、受講者が自身の宿題に記述した模擬授業構想について、プレゼンテーションをおこなった。宿題のプレゼンテーションは、当初の計画には入っていなかった。これは、欠席者に配慮して、班での共同作業を3日目にできるだけずらすことを意図したためである。結果として、教室前方に出て全体に向けて語るという点で、模擬授業での授業者役に近い状況を早めに体験させることにもなった。

プレゼンテーション終了直後に、スタッフ全員が集合して、今後の班構成について話し合いがもたれた。そこでは、必ずしも各自の関心テーマの類似性のみに即して班分けをするのではなく、授業や教材に対する考え方が、班の中で、ある程度多様になるようにした。

班構成が決定し次第、すぐに受講者に対して班構成（A～Dの計4班）を伝え、さらに班活動のアドバイス役として、各班にスタッフのなかから一人ずつ担当者が付き、模擬授業に向けての班活動が開始された。この点に関しては当初の計画では、指導案作成等の、模擬授業の内容や流れを決める具体的な話し合いを進める予定であったが、欠席者が多くいることに配慮して、各班おおまかなテーマ設定をし、そのもとでインターネット等を利用して幅広く参考資料を集めるよう指示するという方向に転換した。各班に分かれた受講者は、まずプレゼンテーションで述べた各自の関心を照らし合わせ、どのようなテーマを設定するのかを議論した。ある程度テーマが定まった班は、すぐにパソコンが設置してある部屋に向かい、インターネットを用いて資料検索にあたった。1時間程度の間に、各班は3日目の具体的な授業設計に向けてのさまざまな参考資料を、効率的に入手した。

3日目は2日目を欠席した7名のうち5名が参加してきたことから、第一に、既存の4つの班にその新規参入者5名を振り分けた。

3日目の最初の活動では、スタッフ1名が授業者となって、学習者である受講者に、模擬授業の実施例を示し、さらにその授業案やその作成過程について解説した。これは、受講者全員が、実際に模擬授業を受け、さらにその授業が出来上がるまでの舞台裏を知ること、具体的なレベルで模擬授業のイメージをつかむことを目的としている。なお、当初の案では、これは「模擬授業への案内」のなかの具体化段階の活動として予定していたものである。

次に、「模擬授業の実践」の設計段階に入り、班ごとに、2日目に集めた資料をもとに、模擬授業についての、より詳細で具体的な検討を始めた。このときに、新参者はスタッフの指示で加わるべき班に振り分けられ、さらに各班において2日目の参加者から、これまでの作業についての説明を受けた。ここで、班単位の活動が再開した。班メンバーの意見を集約しまとめるための道具として、1日目に用いた付箋紙をここでも活用した。付箋紙をスケッチブックの上で貼りかえながら模擬授業内容の詳細が決まってくるにつれて、授業で用いる教材のイメージも具体化し、適宜、役割分担をして教材づくりをおこなった。また逆に、教材をつくりながら、授業の流れや発問を修正・考案していくという姿もみられた。

3日目午後は、模擬授業設計の最終局面に入り、各班とも全体としては時間不足ながらも無事に準備を終え、成果を発表することになった。ここからが、模擬授業の実施段階である。模擬授業は、各班が教室の前に授業者として立ち、他の班は学習者として着席した。授業者は、授業案のもとで、

さまざまな教材や発問をとおして授業をおこない、また学習者は、授業の展開に応じて質問を投げかけたり、意見を出したりした。各班は、持ち時間の20分をほぼ正確に使い切って、模擬授業を終えた。

模擬授業の実施を含めてこれまでの自分たちの活動が、言い換えれば活動を振り返ることができるようにするために、最後にスタッフを受講者全員が囲んで、反省会を開いた。また、3日間の映像記録をその場で編集し、さまざまな効果を加えてまとめあげ、リフレクション・ムービーとして放映した。さらに、3日間の活動の様子を写真と文字で綴ったリフレクション・ノーツを配布した。これらはすべて、共有した3日間の活動を、受講者がじっくりと振り返ることを目的とするものである。

受講者には各コースに共通して、レポート提出が課されている。当日持ち帰ったリフレクション・ノーツに加えて、後日スタッフの側から、リフレクション・ムービーの動画テープやリフレクション・ボード等の静止画印刷物を各受講者宛に発送し、振り返りの材料にしてもらった。

3. 模擬授業への案内 — 参入段階／相対化段階／具体化段階 —

前章では、サマースクールの概略的な実施経過について述べた。すでに述べたように、本コースの活動は、「模擬授業への案内」（参入段階／相対化段階／具体化段階）とそれに続く「模擬授業の実践」（設計段階／実施段階）から構成されている。そこで本章と次章では、各段階の特筆すべき諸活動に焦点を当てて、本コースの特徴を描いていきたい。

まず本章では、本コースのもっとも中心的な活動である「模擬授業」の、その準備に至るまでの3つの段階について解説する。これは、受講者を模擬授業へと「案内」する過程であり、スタッフの側からは、受講者に対して段階に応じた多様なアプローチが提供された。

3-1 参入段階

3-1-1 パンフレットの配布

本コースでは、受講者を迎えるにあたり、パンフレット〔図1〕を作成し、それに沿って3日間の活動の流れを口頭で説明した〔写真1〕。このパンフレットは、A3の用紙を9つに折ったものである。折ったパンフレットの中には、アイスブレイキング（次項参照）で用いる風船を入れている。表紙と同じ面には、開催場所を記した写真付きの地図、受講者とスタッフの氏名の一覧が載っている。この表紙の裏には、本コースのスケジュールを日程ごとに示している。これらは、受講者が開催の意図や目的を知ったり確認したりすることなどを意味している。これは、その後の活動をスムーズに展開するために大切なことであるという理由から、ワークショップなどの導入には欠かせないものであると考える。つまり、受講者やスタッフの氏名を記述することは初対面同士の受講者が



写真1 日程の説明

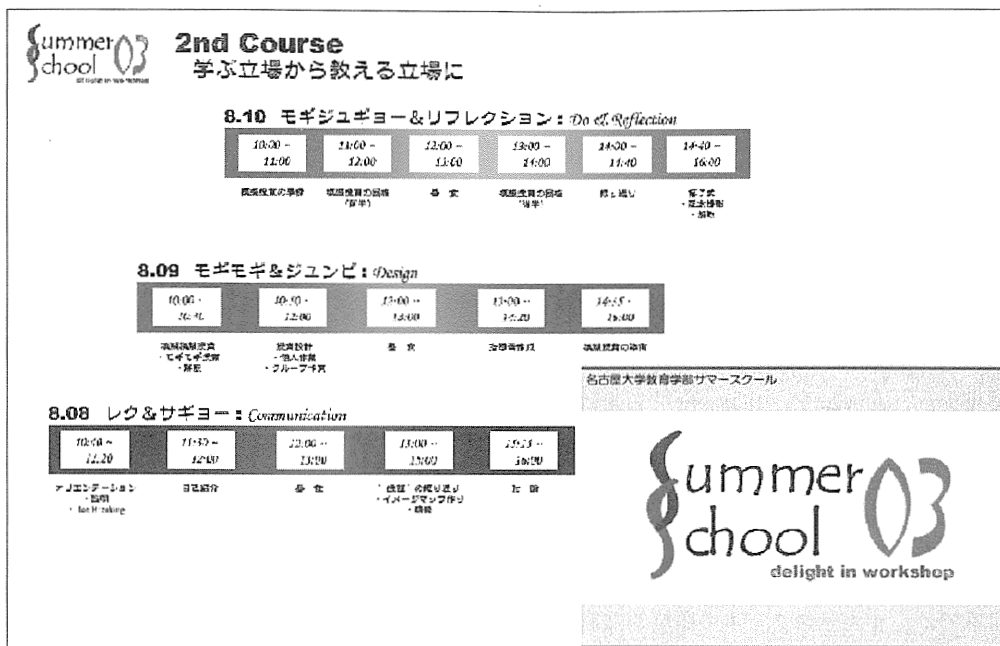


図1 パンフレット

打ち解けあうこと、スケジュールを示すことは作業の目的を立てること、を可能としグループ活動を円滑に進めることができる。

3-1-2 アイスブレイキング

上記パンフレットのなかには、風船が一つ入っている。パンフの内容を読み、自己紹介用の名札を作成し終えた者から、その風船を膨らませてもらった。自己紹介後、スタッフを含めて全員が名前を覚えつつ交流を深めていくことを目的として、その風船を使ったアイスブレイキングをおこなった。参加者全員が2組に分かれて輪になり、各組に一つずつ風船を用意し、そこにマジックで自分の名前を書いた。そして、風船を宙に向かって打つが、そのときに風船に書いてある名前のどれかひとつを呼び、次にその呼ばれた者が風船を打ち、またそのときに同じく他の誰かの名前を呼ぶ…のようにして、風船を落とさないように打ち続けていった [写真2]。相手の名前を覚えることができるだけでなく、笑いのなかで仲良い雰囲気をつくりあげることができる。



写真2 アイスブレイキング

3-2 「授業」の相対化段階(1)

3-2-1 PLAN-DO-SEE

模擬授業の設計を支援するために、アイディアの構成への刺激とする段階として、スタッフからは講義をし(「授業」の相対化段階(1))、受講者には各個人および小集団にての作業を行わせた(「授業」の相対化段階(2))。

「授業」の相対化段階(1)では、スタッフによる2回の講義を行った。まず1回目の講義では、受講者が授業イメージを想起させる作業(3-3-1)を行った後に、より良い授業にとっての「PLAN-DO-SEE」の必要性について説いた[写真3]。

講義では最初に、教えるということとは、知識や技能を伝えるということにとどまらず、学ぶことにどのような意味があるのかを伝えていくことの重要性について説明した。とくに、「これを学ぶことが大事ですよ」とことばで伝えるだけでは不十分である。授業者にとって重要なことは、学習者が学ぶことに意味が感じられるようにすることであることを強調した。



写真3 スタッフによる講義

つぎに、より良い授業を目指すためには、漠然と行うのではなく、意識(自覚)的にPLAN-DO-SEE(設計-実施-評価)を行うことの必要性を論じた。またそのためのポイントとして、次の4点を説明した。

- ・明確な目標を立てる。

授業をするには、まず明確な目標を持つこと。

- ・学習者の実態を捉える。

学習者の実態を踏まえて授業を設計すること。実際にやってみないと分からないものがあるが、できるだけ実態をとらえて、それを反映させる。

- ・柔軟なプランを立てる。

明確な計画を立てるが、実施しながら修正できるようにする。学習者の状況を見ながら、授業をする。

- ・実施した授業を振り返る。

目標を達成できたかどうかの確認。できた・できなかったという評価とともに、影響する要因を考える。また、目標にとらわれず、意図しなかった「副作用」も、評価によって明らかにする。

3-2-2 授業設計の具体的手順

2回目の講義は、受講者が模擬授業の設計へと入る直前段階として、受講者が授業設計の手順を

具体的に押さえることを狙いとしている。

本講義では、具体的な授業設計の手順として、以下の点を解説した。

- ・学習内容の構造化
- ・教材研究（素材の教材化、教材解釈）
- ・主たる発問、説明、指示の内容の具体化
- ・予想される学習者の反応の想起
- ・学習者の反応等に応じた計画の複線化……柔軟な計画
- ・授業案の作成（授業展開の具体化）

また、模擬授業を行うにあたっては、資料やワーク・シートなどの教材を準備することとともに、授業の流れや、発問を適切に考えることが不可欠であることを説明した。さらに、すでに流通している教材を利用する場合でも、新たに素材を教材化する場合でも、授業者が、教材が有する教育的意味を（再）発見し理解していなければならないことを強調した。

最後に、模擬授業での教材作り（教材開発）の参考となるよう、具体例をあげながら、可視性、操作性、現実感など、すぐれた教材の条件について解説した。

3-3 「授業」の相対化段階(2)

3-3-1 「授業」のイメージマップづくり

これまで受講者が受けてきた授業を想起させる。各自に渡してあるスケッチブックの1ページを使い、中央に「授業」と書かせ、そこから枝を伸ばし、楽しいやつまらないなどの形容詞を授業に関するイメージとして思いつくまま書き出させる。そしてその形容詞に具体的な例を付させる。3色ボールペンにより各自の思いのままに色分けしながら授業のイメージを膨らませる[写真4]。この作業は、模擬授業の設計をする際に、授業を受ける生徒側の立場も考慮できるよう配慮し行わせたものである。

ここで受講者から出されたイメージを整理すると以下ようになる。

▼良いイメージ

楽しいー体を動かす、知識が増えたと

実感できる、新しい発見がある

面白いー分かる授業、先生が面白い

（ひきつける、笑わせてくれる、雑

談あり、日々の生活では知れない雑学を教えてくれる、体験談）

嬉しいー分からなかったことが分かる

▼悪いイメージ

つまらないー興味が持てない内容、分からない、受け身

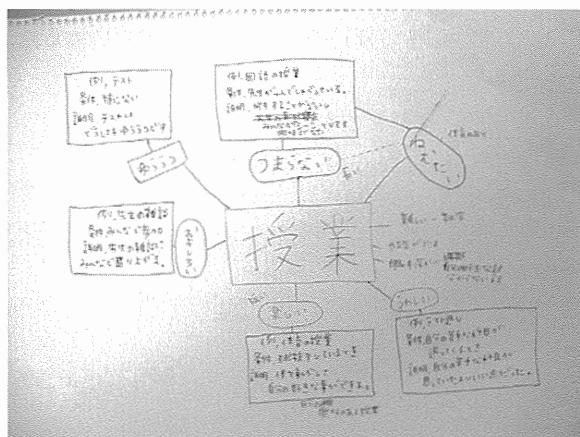


写真4 授業イメージマップ

難しいー初めて知ることが多すぎる、理解できなくなる（スピード）

眠いー先生の声（単調）、教科書の説明のみ

3-3-2 教師のなすべき仕事の抽出

4人の小集団で教師がなすべき仕事について考えさせる。まず各自が描いた授業イメージを小集団に持ち寄り、互いに意見の交換をする。持ち寄った授業イメージを描いた用紙を模造紙の四隅に貼り、「よい」授業をするには、教師にはどのような仕事が必要か、考えられるものを付箋紙に書き出し、貼り付けていく。最初はランダムに書き出したものをグルーピングし、教師のなすべき仕事を整理していく [写真5]。これは、この後の模擬授業設計において学習者と授業者の立場（1日目の講義内容）とを意識させながら役立たせるため行われたものである。

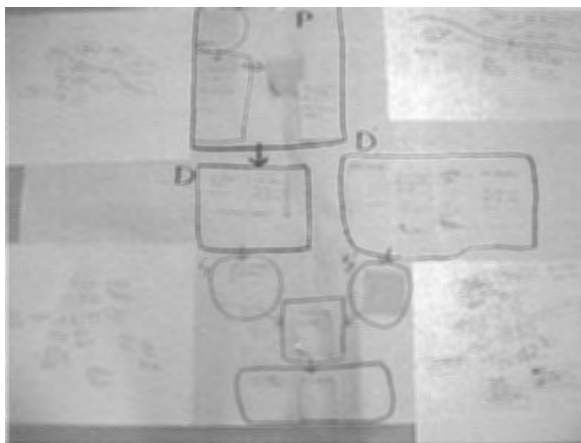


写真5 教師のなすべき仕事の抽出

ここで受講者に抽出された教師のなすべき仕事は以下のように整理できる。

[Do]

▼話し方；コミュニケーションをとる（一方的に喋らない）、体を生徒の方に向ける、ハキハキ大きな声で

▼説明の仕方；板書する、分かりやすい言葉を使う、資料を使う（読みやすいもの）

▼発想を広げる支援方法；知識・材料を豊富に与える

▼授業の形態；参加型にする（発問方法を工夫する（例：質問を投げかける）、体験させる、ゲームを取り入れる）

▼態度；模範を示す、生徒と一緒に問題を解く

[Plan]

▼授業の予習

1) テーマ決め；何を伝えたいのか明確にしておく

2) 下調べ、準備；

内容を詳しく調べておく（質問にそなえて答えられるようにもしておく）

資料を作る（他分野との関連話も仕入れておく）

分かりやすいプリント作り（例を入れるなど工夫する）

進め方を考える（時間内におさめる、初めの3分程（導入）で生徒を惹き付ける方法を考える、どんな話をするか考える、資料の提示の仕方を考える）

3) 生徒に合う教材・教具の選択；

生徒を見る→理解度の観察→理解度に合わせた進め方を考える

3-3-3 模擬授業のテーマ模索

受講者による模擬授業のテーマを決めるため、してみたいと思う授業について、まず各自に簡単な授業設計を考えさせる。ここでは、授業のテーマから、どのような目的をもってどのような授業を構成するかを、各自におおまかにつかませる。これにより、翌日以降に行われる模擬授業の設計において、その方法を各自が認識することができる。

上記の作業を円滑に進めるために、1日目の終了時にワーク・シート〔図2〕を配布し、各自が自宅において考えてくるようにした。記述させる内容は、授業を設計する際に重要と考えられる、授業のテーマ、授業の流れ、準備するものの3点に絞った。これは、受講者が自宅においてひとりで考える際、整理がしやすいと考えたからである。このようなシートをもちよることで、受講者同士はもちろんスタッフも、受講者各自がどのようなことを考えているのかなどを共有することが可能となる。また、ここで表される受講者の興味関心は、模擬授業の班構成の参考としても用いられる。

図2 ワークシート

3-4 「授業」の具体化段階

3-4-1 模擬授業の例の概要

スタッフが模擬授業の例を呈示する目的は、受講者が自ら授業について振り返り、その新たな視点を獲得することである。したがって例は、できるだけ受講者たちが授業を構成していく際に活用できる要素が多くなるように、受講者の設計・実施条件にできるだけ近い状況を想定した上で構成した。実施時間は、受講者に割り当てられる時間と同じ、20分である〔写真6〕。

模擬授業の例の、おおまかな構成は以下のとおりである。

テーマ：「私たちの水生活について考えよう」

授業者：スタッフ1名

授業目標：

1. 自分たちが普段の生活でどれだけの水を使っているのかを実感する。
2. 今後の水の利用について、さま



写真6 模擬授業の例

ざまな問題があることを知る。

授業概要：

導入－水についてのイメージ形成

…水について述べたことばを提起し、そこからイメージを形成させる。

展開1－自分たちの水生活を振り返る。

…普段使っている水の量について考えさせる。

展開2－水の使用量について考えを深める。

…世界各国との使用量比較を通じて、日本の水資源の現状をつかむ。

模擬授業の例の試みは、受講者に授業構成のイメージをつかんでもらい、また実際の授業を体験してもらうことによって、受講者自身が今後行う模擬授業の計画をスムーズにすすめることを目的としたものである。したがって本模擬授業においては、「導入」、「展開1」、「展開2」という場面設定を明確に行うことによってそのイメージ形成を促すようにした。また、模擬授業の実際の計画のために、まずは迫るべき題材についてのイメージをふくらませ、それをもとにしてその題材にせまって追究するという手順を示した。

3－4－2 模擬授業の例の概要

引き続き、授業者とは別に、スタッフ2名が受講者に対して、模擬授業についての解説をおこなった。解説は、授業者がどのように模擬授業の例を設計していったのかについて、その過程をひとつの手がかりとして説明することで、受講者が具体的に模擬授業の設計のイメージをつかめるようになることを、目的としている。解説では、プロジェクタを利用して、設計過程の写真を示しながら、その各場面の作業内容を説明した。

解説のおおまかな内容は以下のとおりである。まずは、授業者が自身の関心から、水の利用について授業をおこなおうと思い立ったところから、付箋紙を用いて漠然とした雑多な考えを列挙していく。次に、それらを分類しながら考えをまとめ、話の流れを整えて、授業案を作り出していく。そして最後に、各状況での具体的な発問や必要とされる準備物を詳細に検討していく。こうして、受講者は自身が学習者として実際に体験した模擬授業の例の、舞台裏を知る。

今回は、限られた時間のなかで、複数名の意見をまとめてひとつの授業を組み立てなければならなかったため、議論を整理するひとつの手法として、付箋紙を用いる方法を例示した。受講者は、こうした設計方法が一例としてあることを知り、その方法をヒントにしつつ、次章に示す各班の活動へと再び入った。

4. 模擬授業の実践 ー設計段階／実施段階ー

本コースの目的は、受講者が、学ぶ側



写真7 web ページの検索

から教える側へとその立場をかえることによって、教師の視点から授業について考えることができるような契機を作り出すことである。そのもっとも主要な契機であり、また本コースのなかでもっとも時間を費やすのが、「模擬授業の実践」の取り組みである。

模擬授業はその設計段階から実施段階に至るまでを、班の共同作業として経験していく。2日目以降、受講者は3～4名ずつの班に分かれて、そこにスタッフが1名ずつ班の担当者として付き、指示・助言にあたった。

以下では、2日目と3日目における、各班（A～Dの計4班）の模擬授業の設計段階から実施段階に至るまでのプロセスを、班担当者の視点から追っていく[写真7、8、9]。

4-1 A班の活動

（担当：坂本 将暢）

4-1-1 班の特徴

本班は、受講者のうち、地球温暖化や気象を模擬授業のテーマとしたい4名（男子2名、女2名）から構成された。

持参した資料や発言から、班員は地球温暖化や気象について、日常から意識しているように思われる。

4-1-2 目標とする授業像

地球温暖化という大きなテーマに対して、学習者の興味関心を引きつけるために、部屋や教室にある身近なものを教材として用いた授業を展開した。

4-1-3 模擬授業の設計段階

3名（台風の影響で男子1名が欠席）から、模擬授業のテーマの案として、以下のようなものが挙げられた。

- ・ 地球温暖化に対する人間の関心の違い
- ・ 台風などの気象現象
- ・ 自然環境と人間の関係性

各自が関心あるテーマについて発表し、意見交換をした。その結果、自然環境に対して共通の関



写真8 授業案の作成



写真9 模擬授業の実施

心を持っていることが確認された。話し合いの結果、地球温暖化をテーマにした模擬授業を進めることが決定した。このテーマに対して、班員は次のような情報を持っていた。それは、地球温暖化の原因のひとつが家庭から排出されるCO₂であること、地球温暖化が原因による海水の水位の上昇とそれによる土地の沈下、農業への影響、そして生態系の変化である。このように地球温暖化は、われわれの生活に密着している内容であり、われわれが意識をすれば防ぐことができると思われる内容であることから、本班のテーマに決まった。

さらに、模擬授業の方針として、地球温暖化に対する学習者の関心の違いを取り上げること、が確認・共有された。この方針は模擬授業の実施段階に至るまで一貫しており、模擬授業の中にもその特徴が見られた。具体的には、授業者が地球温暖化の原因となるガスの成分を調べて、それを学習者に呈示するのではなく、人間のどのような日常的な行為が、地球温暖化に影響をもたらしているのかについて考えさせるということである。ここで議論になったのが、人間の関心の違いの原因をどのように設定するのか、である。これは、このテーマの教材を考える上で重要なことである。ある班員は男女間や職業間による違いを、また他の班員は国家間による違いを調べることの必要性を挙げた。他方で、担当者からは、部屋や教室などにある日常的なものを素材として地球温暖化について考えることを提案した。これは、台風の影響でスケジュールが大幅に遅れていること、模擬授業の班員の関心を引きつけられると思われること、受講者の一人がバイキングでは得をしているか損をしているかという日常の些細なことに関心を持っていたこと、が契機となった。この提案に対して班員も興味を持ち、広い教室でエアコンを10分間つけた場合どうなるのか、部屋の照明をつけたまま寝た場合どうなるかなどの疑問を持った。これらの疑問点については、図書やwebページなどを用いて調査することにした。

3日目は、班員を1名加えて話し合いの続きをした。内容は、班員が図書やwebなどで調べた内容の発表と意見交換である。各班員は、家庭から排出される二酸化炭素の量について、電力会社の考えや取り組みについて、環境庁の考えや取り組みについて、それぞれ調べてきた。このように各班員は、地球温暖化というひとつのテーマに向き合うさまざまな団体について、それぞれの視点で調査した。しかし、各自が伝えたい部分の整理はできていなかった。そこで担当者は、2日目に参加していた班員には各自が調べた内容をまとめる作業を、そして加わった1名にはほかの班員のテーマを活かすことができる授業の展開などについて考える作業（この班員は、話し合いの中で2日目の活動や調査内容を聞いた）をさせた。この結果、日常生活の中にありながら気がつかないことを数値化して差を表すこと、この差の単位にはペットボトルの本数などを用いること、模擬授業の導入でわれわれの生活が地球温暖化に結びついている意識を持たせること、電力会社と環境庁とが同じ内容についてどのように表記して考え取り組んでいるのかを呈示すること、発問を促すために扱う電化製品を夏のものにするなど、などが決定した。

4-1-4 模擬授業の実施

▽テーマ：「地球温暖化について」

▽ねらい：われわれの身近なものが、いかに地球温暖化に影響を及ぼしているのか考える。

▽授業の流れ：

班員は、地球温暖化の説明を導入に選んだ。この説明は、難解な用語を用いず、きわめて簡単な

ものだった。続けて地球温暖化の一原因である二酸化炭素に焦点を当て、二酸化炭素排出場所（工場、家庭など8箇所）と排出量の組み合わせについて、学習者にクイズ形式で考えさせた。ここでは、工場からの排出量が多いことは自明であるが、予想以上に家庭からの排出量が多いことを学習者に気づかせることが目的である。このように、模擬授業の展開を、地球規模の温暖化の話から二酸化炭素、そして身近な家庭へとすることで、スムーズに模擬授業を進めることができた。

次に、授業者は、家庭の中で電気を消費する機器を学習者に列挙させた。その後に、webで調べた統計として整理されている情報を呈示した。この呈示物から、予想以上に照明が電気を消費することを、学習者は学んだ。

次に、授業者はプリントを配布した。このプリントには、クーラーの温度を一度下げると一日あたり何人分の二酸化炭素排出量を減らすことができるのか、ということが書いてある。授業者は、数分間、学習者に考えさせた後に、答えを言った。その理由は、プリントに書いていることを考えることよりも、これを契機として話し合いを展開したいと考えていたからである。ある学習者は、日常必要以上に電気を使っていることを認識し改善するべきだ、と発言した。ほかの学習者は、必要なものは減らさなくてもいいのであって無駄な部分を減らすべきだ、と発言した。このように、しばらくの間、自分たちにできる電気消費量の削減方法について考え、意見交換した。具体的には、コンセントを抜く、冷房の温度を上げる、電気製品の使用頻度を減らす、カーテンやブラインドを開けて照明を切る、といったアイディアが挙がった。

最後にまとめがなされた。具体的には、ここまでではわれわれ個人の取り組みについて授業を展開したが、ここでは企業と国（環境庁）の取り組み（例えばエコカー、環境税、省エネ製品）について挙げ、個人・企業・国の関連性などを説明した。この説明の終わりとともに模擬授業も終了した。

4-1-5 考察

日ごろ関心を抱いていることをテーマに選んだことで、班での話し合いも積極的に交わされたと考えられる。また、webページを用いた調査では、一般的には目に留まらないと思われるような情報を見つけ出し、それを模擬授業の中で有効活用ができるように工夫した。その結果、スムーズな授業展開が可能になったと考えられる。

4-2 B班の活動（担当：世古 篤）

4-2-1 班の特徴

本班は、「食に関すること」に共通に興味を持つ女子3名で構成された。

話し合いは、比較的穏やかな雰囲気で行われた。しかし、話し合い全体にわたって班員の発言が消極的になりがちであったため、そのなかのひとりの班員が積極的に発言や準備を行うという場面が多く見られ、事実上のリーダーとしての役割を担っていた。

4-2-2 目標とする授業像

現代の自分の食事スタイルについて振り返りをさせることを目標とした。しかし、その際、単なる講義形式や「べき論」で迫るのではなく、発言を多くしてもらうことによって学習者の主体的な参加を促し、かつその参加を実感できるような「おもしろい授業」の展開を心がけた。

4-2-3 模擬授業の設計段階

模擬授業の設計は2日目の午後から行われたが、台風の影響で1名が参加できなくなり、この日は、2名で計画を進めることとなった。

当初、その2人からはそれぞれに関心のあるテーマとして、以下の2つの案が示された。

- ・「おはぎとぼたもちの違いについて」：

おはぎとぼたもちの歴史を紐解くことによって、両者のちがいを明確にする。

- ・「食生活の歴史から考える日本の未来」：

日本の食生活の歴史と世界の食生活について学び、現代の食生活について考える。

各自が挙げた題材より、まずは「食に関すること」を共通点として、授業構想の話し合いを始めた。その中で次第に、両者とも現代の食生活に関して興味を持っていることがわかり、自分たちに身近な食生活をもう一度相対化して見直したいという関心がみられた。したがって、双方の出した歴史的視点を手段として活用することによって、その相対化を試みることとなり、模擬授業の題材も「食生活の歴史」をメインで取り上げることが決定した。

その後、インターネットを活用して昔の食事スタイルや食事の内容などについて調べる作業を行った。しかし、ここで班員の気を引いたのが、食事スタイルとライフスタイル、そしてそれに伴う住居構造との関連についてである。実際、昔の食事について調べるだけではなかなか授業の核となるべき主題を探しあぐねていたが、このライフスタイルや住居構造というものを切り口として追加することによって、模擬授業の方向性が少しずつ確定することとなったのである。

翌日は、各自で前日に調べたものを持ち寄って、授業案の骨子づくりを行うことが予定されていた。しかしその前に、前日参加できなかったもう1名の班員が新たに加わったため、彼女の構想していた授業案を発表してもらい、その意見を織り込んだうえでもう一度構想を練り直す作業が行われた。ただしその授業案は「おむすび」を題材に構想されたものであり、その中には「おむすびの歴史や現代の変遷のありよう」という内容が含まれていたため、前日に本班が構想していた方向性と大きく齟齬をきたすものではないことが確認された。そのうえで、その班員に了解をとり、食生活の歴史をライフスタイルや住居構造の面から捉え直し、現代の自分の食生活を見つめ直すという、模擬授業の主旨が決定した。

具体的な構想においては、食生活を見直す契機として、食事の形態の変化に着目した。すなわち、ひとりで食事をする「孤食」か、家族と一緒に食べる「共食」か、という形態を取り上げ、なぜこのような形態の変化が生じているのかということについて、班員が互いの意見を出し合い、まとめていった。その中で、メインテーマである住居構造との関連ということ、食事をする部屋に求められる機能の面から捉え直すという方向性が確立した。最終的な結論として、「孤食」と「共食」のどちらがよいかをせまるという流れも考え出されたが、それを迫るよりもまずは自分の食事スタイルを振り返ることの大切さを実感してもらうという方向性で、班として合意した。

実際の授業準備の場面では、3日目から参加した班員の参加をどう促すかということが、ひとつのポイントになっていた。その班員からはなかなか積極的な発言はみられず、指導者の側としても、その班員に意識的に話を振り、発言を促すことをその主な役割としていた。しかしこの班は、3日目の当初からこの班員の持参した授業案の検討から始め、その意見を織り込んでいったりすること

で、2日目に参加できなかったハンディを何とか克服させようという意識が見られた。このことは、3名の相互参加と相互の平等性、そして参加機会の均等性をできるだけ確保しようとしたものと考えられる。

4-2-4 模擬授業の実施段階

▽テーマ：「食生活の歴史」

▽ねらい：現代における自分の食事スタイルを振り返る。

▽授業の流れ：

①自分の食事スタイルについて振り返る－「孤食」と「共食」

まず、自分の食事の形態について「家族全員で食べる」「家族の何人かで食べる」「ひとりで食べる」、という、各々の選択肢に挙手してもらい、自分の現在の食事スタイルを認識させる。

また、ここで「孤食」と「共食」という2つのことばを用いて呈示することにより、この模擬授業で考えていくことを明確にする。

②食事スタイルの変化－住居構造の面から

「孤食」と「共食」を表したイラスト（既製の出版物のイラスト）をOHCで見せ、双方のイメージを具体化する。

そのうえで、昔は「共食」のスタイルが主流であったということを前提に置き、いまなぜ「孤食」のスタイルが増えているのかということを考えさせる。その際、昔と現代との住居構造の違いに着目し、特に部屋に求められる機能の変遷を説明することによって、「孤食」増加の原因を探っていく。例としては、昔の部屋には食堂でありリビングであり寝室でもある、という複数の役割が付与されており、食事を含めたすべての行事が家族単位でなされていた、ということを取り上げた。

また、ここでは余談として、卓袱台のかたちに関する逸話を取り入れ、単なる講義形式のみに陥らないように工夫をした。

③総合討論－「孤食」と「共食」について

これまでの話を総合して、「孤食」と「共食」について、生徒それぞれの持ったイメージを発表させる。

その際、「孤食」、「共食」のどちらがよいということではなく、自分の食事スタイルをまず振り返ることの大切さを、まず認識させる。

4-2-5 考察

今回の授業の構想は、先述したとおり、いかに「おもしろい授業」を展開するか、ということに班員全員がこだわったものとなった。1日目のプログラムの中では、3名が共通して「おもしろい授業」には学習者の主体的な参加が必要と考えている。今回の模擬授業においても、最初に学習者の発言から授業展開の契機をつくり出し、また最後の部分において討論を組織するなど、その思いは反映されたといえるであろう。

しかし、今回取り上げた食事スタイルというのは、本来さまざまな切り口からの討論が可能な問題である。今回は住居構造の面から迫ったが、実際の討論場面においては、住居構造の変化よりも、雇用形態や子どもの教育の問題等に表されるように、「ひとりで食べざるをえなくなった」と

いう状況に関する発言が多くみられた。また「孤食と共食はどっちが多いの？」というように、学習者からは、授業者に対する予想外の質問も多く出された。住居構造から食生活にせまるという視点は非常にユニークであったが、その他の視点を持ち出されたときの対応が困難になるという事態が見受けられた。

また模擬授業自体の進め方については、本班は3名という少人数でもあったため、3名ともが授業のそれぞれのパートを担当し、ひとつの授業を創り上げた。先述したように、実際構想段階では準備や発言がひとりの班員にかなりの度合いで集中した面もあったが、彼女が意識的に他の班員に発表の機会を与えたことによって、各自がそれぞれ模擬授業の発表を担当し、こなすことができた。このことは、準備段階から引き続いて大切にされてきた、一人ひとりが平等で、均等に参加機会を持つという意識が表れた結果であると考えられる。

4-3 C班の活動（担当：山川 法子）

4-3-1 班の特徴

本班は、音と人との関係に対して共通の関心を有していると思われる班員が2名、まったく別のテーマを初発の考えとして挙げている班員が2名の計4名（男子2名、女子2名）で構成された。2日目は2名で模擬授業のテーマ決定について話し合いをした。当初、互いの関心は異なるところにあったのだが、音楽に対して共通の知識を有しており、互いの意見に歩み寄ることが容易であった。3日目から参入した2名にも自己の意見を伝える、他の意見を聞く、互いの意見を検討・融合する、といった話し合いの姿勢が身に付いており、スムーズな展開が可能であった。

4-3-2 目標とする授業像

音楽の効果について多様な側面から迫り、学習者に対し、音と人との関わりについて、体感を通して、考えながら理解してもらえらる授業を設計する。

4-3-3 模擬授業の設計段階

模擬授業の設計段階について、本班において特記すべき点を以下に示す。

i. テーマ検討

当初2名（台風の影響で男子1名、女子1名が欠席）から、模擬授業のテーマの案として、以下の2つが挙げられた。

- ・クラシック音楽史
- ・楽しく授業を受ける(行う)ための授業

しかし、互いに興味を引くテーマではないこと、自分が出したテーマにもあまり乗り気になれないこと等、本音を出し合い、他のテーマを探ることとなった。準備の時間が短いことを意識し、詳しいことや趣味などを基点にして、そこから授業を進める方向で出された新たな案が、スポーツや食べ物に関する授業である。

初発の授業テーマ案とは関係の薄いものとして挙げられた案だが、その中のスポーツというキーワードから、その大会等で用いられるテーマ曲に着目し、新たに出した授業テーマ案と音楽とを結びつけ、音の効果についてテーマを絞ることとなった。

なお、3日目から参入した2名のテーマは、以下であった。

- ・テレビコマーシャルが人に与える影響
- ・サッカー日本代表のこれからについて

テーマについては2日目に決定していたため、3日目からの参加者はそれに賛同したのだが、そのうち1名は、コマーシャルで使われる効果音について興味を持っていたため安堵し、スムーズに加わった。もう1名も自己のテーマには拘りを見せず、決定していたテーマに沿って積極的に意見を出し、参加は支障なく行われた。

ii. 導入についての検討

①学習内容による、授業での“楽しさの追求”の制約

導入については、主に2点が検討された。ひとつは曲をかけるかどうか、かける場合どの曲が良いかであり、もうひとつは発問はどのようにするか、である。

導入での曲使用についての検討は、授業のインパクトと楽しさを主眼においたためである。授業の流れにおいては、始めに音楽史を理解させる計画であるため、曲をかけるのであれば聖歌にしようという案が出たのだが、最初にかけると雰囲気は暗くなり、導入としては不適ではないかという意見が出た。そこから、始めにかけるならば入場曲などに使われているような明るく人を引きつけるような曲が良い。しかし、音楽史について話すならば、結局始めは聖歌からかけることになる。始めに音楽をかけずに、音楽史の話だけにするのはどうか。などの意見が交わされた。この場面では、学習内容を班員自ら固定してしまっていたため、授業“楽しさの追求”を制約してしまうことになり、どのような音楽を選択するのが良いかということについて選択肢が狭まっている様子が窺える。

②発表と授業との違いについて

発問については、始めにどのように話をするか、台本のようなものを考えておくが、文章をしっかりと書いてしまうと、発表のように読んでしまうため、キーワードだけをメモしておこう、という案が出された。なお、ここでは、それ以上の授業と発表との追究がなされていないが、この視点は模擬授業後の振り返りにもつながっていくことになった。

iii. 授業の方法に関する詳細な点の検討

本班の班員は模擬授業のシミュレーションをしながら授業の構成を考えている。そのため、シミュレーションをする中で、さまざまな意見が出され、検討・採用・修正が行われているのだが、授業構成に関わることのみではなく、授業の流れを意識した上での授業方法の詳細な点についても活発な議論による検討がなされた。

多くの曲が揃えられた際には、時間的に全部の曲を流すのは無理であるし、授業の構成を考えると、どの曲を使うか選択しなければならない。といった授業の大きな流れを決めるものから、班員が4名いることを利用し、役割分担として“音楽係”を決め、その係が授業進行の話に合わせて曲をかけると良い。などのような進行のスムーズさについて意識したものまで検討された。

曲を聞かせた後にどのようにするかについては、学習者に感想を示させたいが書かせるのではなく一目で分かるように、楽しい怖いなど対になる指標を印刷したプリントを作りプラス・マイナスで色をつけてもらう。という案が上がるが、プリントの配布では結果が見えづらいので挙手をしてもらい黒板に指標を示す。というように、意見に意見を重ねるように次々と改良案が出された。

4-3-4 模擬授業の実施段階

▽授業テーマ：「音楽の効果について」

▽ねらい：音楽の持つ効果や影響について、さまざまな側面から体験し考え理解する。

▽授業の流れ：

1. 授業の目的を伝える

まず何も言葉を発せずに、突然グレゴリア聖歌を流す。その曲がグレゴリア聖歌であることを伝え、その時代背景などを解説する。当時こういった音楽が人にどのような効果を与えていたのか等を説明し、この後に模擬授業で何をしていくかの目的を示す。

2. 音楽の効果について

サッカーや水泳の世界大会などにおいてテーマ曲として選択された音楽について、学習者への積極的な問いかけ（発問）をし、使用されていた言葉を想起させるとともに、実際に曲を流し聞かせることにより聞いてどのように感じるかを体感させて、どのようなタイプの曲が選ばれているのかを考えさせる。その他さまざまな曲調の音楽を次々と流し、あらかじめ用意した、楽しいー悲しいを、プラスマイナスで示した座標軸で曲を聞いた時の印象について、学習者に示させる。これにより音と気分との関わりを考えさせる。

3. 音楽と映像のマッチングについて

アニメにおける感動的なシーンに、最初に付されていた音楽に替え、怖いと感じられる音楽を付し、音楽が持つ映像への影響を体感させる。同じ映像であっても音が異なるだけで大幅に印象が変化することを理解させる。

4. 音楽療法について

音楽にはさまざまな影響や効果があるが、中でも気分と同じような歌詞や音の音楽を聴くことによって安心するものを、音楽療法において同質の原理と言い、癒される効果があるということ伝える。カラオケや、自分の部屋で一人で目をつむって好きな曲を聴くなどが、身近な音楽療法として有効であることを勧め、まとめる。

4-3-5 考察

本班は、テーマの選択にかなりの時間を割いた。2名でのテーマ検討であったため、一方が意見を出さなければ意見の交換ができない。したがって、一方が強引に意見を求めるという状況がしばらく続いた。しかし、このことが、ひとりひとりの意見を大事にしていく方向へと繋がったと言える。グループ内で、ひとりが自分の意見を主張せずに黙ってしまい、他の意見に合わせてしまうということなく、それぞれが自分の意見をしっかり伝え、他人の意見も聞き、全員で吟味するという態度が形成された。

それにより本班はそれぞれの意見やアイデアが、単なる分担として切り貼りするように取り上げられたのではなく、授業の大きな流れ・各場面の内容・ツール・授業方法など、全てにわたって詳細な点まで話し合い、練り上げていくことができた。

4-4 D班の活動（担当：内田 良）

4-4-1 班の特徴

本班は、まずは班員2名（男子1名、女子1名）で活動を始めた。班員2名は模擬授業で扱いたいテーマについては共通性がないものの、ワーク・シートのプレゼンテーションをとおして、お互いのテーマに関心を抱いていたためにひとつの班として構成された。3日目には新たに1名（女性）が加わり、計3名で、血液型占いに関する模擬授業を設計・実施した。かれらは当初から、授業の流れについては比較的明瞭な計画性を共通にもっており、またどのような題材であれ、題材に関して幅広い視野から検討を加えたいという志向性を共有していた。

4-4-2 目標とする授業像

人びとは占星術や手相占い等の古典的な占いから、血液型占いや動物占い等の流行の占いまで、多かれ少なかれ占いに接して生活している。そしてこれらの占いを実際に信じている人も、たくさんいる。この模擬授業では、学習者に、占いの作用を一旦相対化できるような機会を提供する。それによって、占いを信じてしまうプロセスを、学習者が具体的に理解できるようにする。

4-4-3 模擬授業の設計段階

本班は、占いに関心をもつ受講者1名と、音楽の効果に関心をもつ受講者1名の計2名で、模擬授業の設計を始めた。まずは、かれらは班としてどちらの題材を模擬授業に利用するのかについて話し合った。その過程で、血液型占いについて話が膨らんだ。そこで、模擬授業のテーマを「占い」とし、血液型占いを例にとって、占いの信憑性を問い、占いの意義について考察できるような授業をつくるという一つの方向づけをもった。

模擬授業のテーマが早くに決定したため、さっそくインターネットを利用して、占いについての資料検索を始めた。多種多様な「占い」に関するサイトがみつかり、なかでも当初から話題にのぼっていた血液型占いについて、より詳細な検索をおこなった。数多くある血液型占いのサイトから、各血液型の「基本的な性格」を詳細に紹介しているサイトを見つけ出し、その紋切り型な説明に違和感を覚えると同時に、それが当たっているようにも思える点を確認し合った。とくにそのサイトが、血液型（A/B/O/AB）×性別（女/男）＝8類型で、人びとの「基本的な性格」を詳細に特徴づけしているため、それらの詳細が自身自身にはあてあまっている／いないという点で会話がはずみ、班としては非常に打ち解けた雰囲気をつくりだした。2日目は最終的に、模擬授業設計の資料となりそうな情報をすべて印刷して、3日目に備えた。

3日目は、2日目を欠席した受講者が1名、本班に加わった。かのじょ自身の当初の関心は先の2名とは異なっていたが、本班の「占い」のテーマにも関心をもっていたため、本班の一員として参加した。こうして3名で、本班の3日目の方向性を話し合うことになった。ここで特筆すべきは、先の2名がどちらかといえば、占いに対してやや批判的な態度をもっていたのに対して、彼女はどちらかといえば、占いを好む（占いは当たると考える）タイプであったことである。2日目の時点でも、本班は占いをやや批判的に捉えつつも、必ずしもそれを全面否定するわけではなかった。新参加者によってその志向が確実になったといえる。なお、このようにお互いの意志が尊重されているものの、これは各自が同程度に発言する機会をもっていたということではない。以降に示す活動では、2日目参加の2名が中心であり、とくにそのなかの男子受講者1名がリーダーシップをとっ

た。

新参加者が加わった状況のもとで、模擬授業実施に向けた具体的かつ詳細な打ち合わせが始まった。2日目に印刷した複数の資料をみて、自由に意見を交わすなかで、「基本的な性格」の8類型がどの程度正しいものなのかを調べてみたいという意見が出た。そこで、8類型の細かな記述から、一般に典型的な性格として知られているものを抜き出し、その血液型×性別の情報を隠した上で、模擬生徒に自分がもっとも当てはまるものを答えてもらい、占いの正確さを測るというテストを考案した。なお担当者の側では、実際に模擬生徒に与える資料や発問が定まらない場合のことを考えて、ヒントとして呈示すべきアイデアを考えていたが、それは上記とほぼ同様の構想であったため、そのまま班員の自主的な発案に任せた。

班は、模擬生徒が選んだ回答の資料上での類型と、模擬生徒自身の実際の血液型×性別類型は、おそらく偶発的にしか一致しないという前提をもっている。そこで次に、そうした不一致があるにもかかわらず、「なぜ占いを信じてしまうのか」という大きな問いにたどり着いた。その問いへのひとつの答えとして、占いによる説明の巧みさに着目した。たとえば、「あなたは～～という傾向にあります」、「が、～～という一面もっています」という留保的な説明を用いることで、幅広い性格特性を含みこみ、当たっている気にさせてしまう。これらの「うまい表現」を、資料を参照しながら、班員で探し出していき、適切なものが見つかり次第、文章化あるいは図化していった。さらに「うまい表現」に、模擬生徒がよりいっそう意識的になるために、発問として模擬生徒にも「うまい表現」の文例作成を指示することを決めた。

この班に特徴的なのは、こうした「うまい表現」を、必ずしも否定的には捉えない態度である。利用の仕方によっては、自分の人生に有意義に活かすこともできれば、逆に自分を追いやることにもなる。各メンバーはこの2つの効果を確認し、模擬授業のまとめとして、生活を楽しんだり、自信をつけたりするようなかたちで、占いとうまくつきあっていくことが望ましい、と結論づけた。

本班は、テーマ設定、教材選び、教材研究、発問の設定、結論づけの作業等において効率的に活動を進め、スムーズに模擬授業の流れを組み立てることができた。そして最後に、各自が授業者として、模擬授業のどの部分を担当するのかについて役割分担をおこなった。その際担当者から班員に対して、授業が教師の一方的な意見の押しつけになってしまわぬように、注意を促した。

4-4-4 模擬授業の実施段階

▽授業テーマ：「なぜ占いを信じてしまうのか」

▽ねらい：占いを信じてしまうプロセスについて理解する。

▽授業の流れ：

本班の模擬授業は、人びとが占いを信じてしまう、あるいは当たっていると感じてしまうプロセスを解明することを目的としている。まず導入として、8つの性格特性が書かれているプリントを学習者に配り、そのなかで自分にいちばん当てはまると思われるものにマルをつけてもらった。全員がマルを付し終わったところで、8つの性格特性が、じつは血液型×性別の8つの典型的な性格特性とされるものであることを明かした。そこで、自分の血液型・性別と、自分が選んだ性格特性とが一致しているかどうかについて尋ねたところ、一致した者は2名であった。

次に授業者役を交代し、ではこのように実際にはほとんどの者が不一致であるにもかかわらず、

人は「なぜ占いを信じてしまうのか」、という問いを出した。やや間をおいて、教師は、ついつい当たっていると感じてしまうような「うまい表現」をいくつか例示し、黒板に貼り付けた。次に、「うまい表現」に意識的になるために、生徒各自に「うまい表現」の例を書き込むプリントを配布し、文章を考え出してもらった。そして、生徒を複数指名して「うまい表現」の例を確認した。

では、「うまい表現」によって人の考えを操る占いに、どのように向き合っていけばよいのだろうか。ここでは、占いがよい効果をもたらす例として、有名な政治家やスポーツ選手が占い師の意見を利用して活躍を広げていることを、図とともに示した。他方で、悪い効果をもたらす例として、占い師の発言によって家族内の人間関係が崩壊してしまうという例を出した。

授業者役を3人目に交代して、最後にまとめとして、以下のように述べた。占いは、表現のうまさによって人の心理をうまく突いて、人を信じ込ませる。その結果は、よい方向にも悪い方向にも展開する。したがって重要なのは、占いのそうした特質をわきまえて、占いには注意深く接しつつ、自信をもつきっかけとしたり一種の娯楽の道具としたりして、有効に活用していくのがよいのではないだろうか。

4-4-5 考察

本班は比較的順調に、模擬授業の設計と実施ができたように感じられる。班員が3名（2日目は2名）の少数だったこと、1名のテーマ内容に大きく依拠したこと、2日目の時点で十分な資料が得られたこと、仲良い雰囲気のなかで意思疎通が適度にとれたこと等の理由が挙げられよう。

また男子受講者1名が、物事を包括的にかつ秩序立ててみるという能力に長けており、本班の順調な活動の中心的役割を担ったといえる。これはよきリーダーシップとして考えたいが、3日目から参加した女子受講者1名がリーダーの発言の陰に隠れてしまいがちになった点は、班運営の方法として担当者サイドが反省すべき点である。

模擬授業の実施段階については、設計段階ではもう少し生徒側とコミュニケーションをとる予定でいたが、実際には教師が淡々と話し続ける場面がいくつかみられた。しかし全体としてはほぼ予定どおりの発問と意見の引き出しができたように思われる。

全体の活動をとおして、担当者は班メンバーに対して、授業内容に関する具体的なアイディアを呈示することはほとんどなかった。ただし、班としてできるだけ指導案をしっかりとつくって、それに沿った授業展開ができるように、授業の形式面について何度か意見をいったり念を押した。

5. リフレクション

本コースでは、日常の教室での経験や本コースでの活動の「リフレクション（振り返り）」を、受講者に促した。3日間を単なるイベントとして終わらせないためにも、受講者は、「教える一学ぶ」という営みをリフレクションの作業をとおして再認識し、教育の場に展開するダイナミズムを理解しておく必要がある。本章では、本コースが重視するリフレクションの作業を、サマースクールの一連の活動のなかで、どのように盛り込んだのかを示す。

本コースでは、受講者のリフレクション作業を促進させるために、さまざまな手段を用意した。「リフレクション・ボード」、「リフレクション・ノート」、「リフレクション・ムービー」が、その主要な手段である。「5-1 リフレクション・ツール」では、各手段の目的や実際の活用方法に

について解説する。

またこれらのリフレクション作業は、レポート課題の提出によって、完結する。レポート課題そのものは全コース共通の取り組みであるが、本コースはとくにリフレクションの態度を重視して課題のテーマを設定した。「5-2 レポートと評価」では、レポート課題のテーマと、受講者の回答、さらにそれに対するスタッフ側の回答ならびに評価について説明する。

5-1 リフレクション・ツール

本コースでは、1日目のオリエンテーションの時点から最終日の活動に至るまで、つねにデジタルビデオカメラやデジタルスチルカメラ、ICレコーダ、MDレコーダ等の機器を用いて活動を記録した。これらの記録は、スタッフが編集を加えて「リフレクション・ボード」、「リフレクション・ノート」、「リフレクション・ムービー」として受講者に呈示した。

「リフレクション・ボード」[写真10]は、本コースの活動をリアルタイムで模造紙に記述していくものであり、教室前面の黒板脇に貼り付けた。タイムラインに沿って、文字によって記述（いわゆる板書）するだけでなく、デジタルスチルカメラで撮影した様子をプリンタで印刷して貼り付けたりした。これは、活動のポイントを受講者が押さえること、ワークショップのプロセスを共有することが目的である。また、このボードは活動を記述するだけでなく、スタッフや受講者からのメッセージなどを記述することで、本コースの全員が交流するための道具としても位置づけた。したがって、本コースにおいて、これは「展開」の道具に位置づく。



写真10 リフレクション・ボードへの書き込み

「リフレクション・ノート」[図3]は、前述したリフレクション・ボードとは別に、本コースの終了時に3日間の活動の様子をA4サイズの用紙数枚にまとめ、冊子にして受講者に配布したものである。ここには、日別でタイムラインに沿った活動の様子を、写真と文章で描いた。これは、サマースクール終了後に自宅や学校で、受講者が3日間の活動を具体的に振り返ることを目的としており、まとめの道具に位置づく。例えば、どのグループがどのような発言・発表をしたのか、サマースクール自体がどのようなものだったのか、などである。このノートは、サマースクール終了後に受講者が提出するレポートを作成する際にも役立つ材料である。

「リフレクション・ムービー」[写真11]は、デジタルビデオカメラとデジタルスチルカメラの記録を用いて編集し、3日間の活動の様子をまとめた映像である。サマースクール全日程の最後に、上映した。リフレクション・ボードやリフレクション・ノートと異なり、リフレクション・ムービーは動画であるため、自分の活動を視覚・聴覚的に捉えることができる。つまり、ほかのツールとは

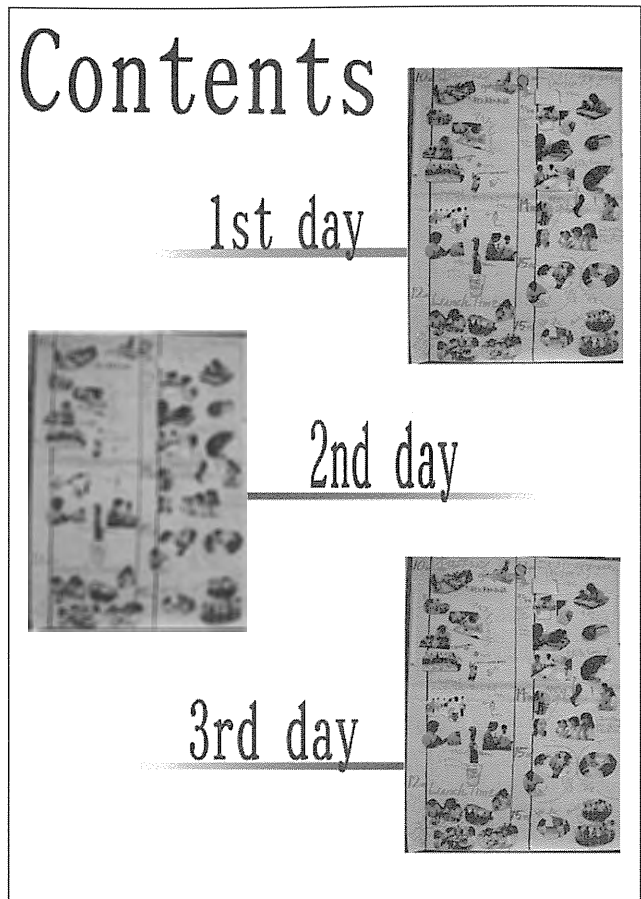
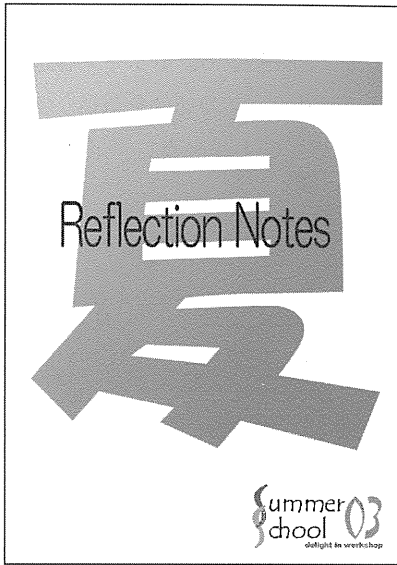


図3 リフレクション・ノート

異なった振り返りが可能になると考えられる。また、このムービーをVHSテープに録画し、サマースクール終了のち数日をおいて、受講者に郵送した。これにより、振り返りのために自分がしたことを自分で見るだけでなく、保護者や友人に見せながらサマースクール自体について話す機会の契機にもなると思われる。

5-2 レポートのテーマとその評価

すでに記したとおり、サマースクールでは、各コースに共通して、受講生には

レポートの課題が出されている。テーマは、各コースの自由な設定に委ねられている。本コースで



写真11 リフレクション・ムービーの作成

は、学ぶ・教える両方の立場から「授業」への接近を試みた経験をもとに、以下の課題に答えるよう指示した。

＜レポート課題＞

1. もう一度、受けた授業・受けたくない授業について考えてみよう。
2. ビデオやスケッチブックを見て、授業を振り返り、
 - 2-1. 教師になるとしたらどんな教師になりたいか
 - 2-2. これからの教師に求められるものは何か？

本コースでは、受講者が日常に経験している授業を「振り返る」こと、3日間の活動を「振り返る」ことで、授業という人間形成の場を捉えなおすことを狙いとしている。そこで、レポートの取り組みにおいても、これまでの経験や3日間の経験を「振り返る」ために、受講者は、改めて自分たちの活動をじっくりと想起する必要がある。そうした理由から、本コースでは、後日スタッフの側から各受講者宛てに、振り返りの材料として、リフレクション・ムービーのVHSテープや、リフレクション・ボード等の静止画印刷物を発送した（リフレクション・ノーツは、サマースクール終了の時点ですでに直接手渡している）。

上記レポート課題は、3日目の最後に受講者に伝え、8月31日までに提出するよう指示した。しかし、サマースクールの性質上、全員のレポート提出を期待することは難しい。実際に提出したのは3日目の14名参加者中9名であった。分量に関しては、A4で6枚分を提出した受講者が1名、他は1～3枚であった。以下では、9名という限定的なサンプルであるが、受講者の回答について、簡単な考察を加えたい。

まず、本コースでの活動から、受講者の何人かには意識の変化が生じたようである。ある受講者は期間中の討論内容を振り返って、「学ぶ側にも努力が必要なのではないか？と思った部分もあった。（中略）どうしても授業を“ただ受けている”といったニュアンスの強い発言が多かった点がとても気になっていた」と述べ、また、「学ぶ側としても『受けたくない授業』を少しでも『受けなくなる授業』になるよう、自ら努力することが必要だと思った」と結論づけている。このことから、3日間の活動をとおして、今まで自分がもっていた授業観や教師観に変化が生まれたことが読みとれる。

またレポート課題の「2-2 これからの教師に求められるもの」について、「授業スタイルの改善」を挙げた受講者もいた。その受講者は、普段から自校の教師とよく懇談しており、その振り返りも織り交ぜながら、授業においては「自分は何が分からないのかを知ること」を、そして教師に求めるものとして「その知識をいかして『学ぶこと』をデザインすること」を挙げた。これらのことを授業で実現するには、授業者が学習者の状態を把握しており、学習者に対して的確な支援を行うという姿勢が求められるものである。本コースで模擬授業の少人数制を経験したことで、「一人一人に目をむけられるような環境」の必要性を主張し、そのことから現在の「教師1人対生徒40人」という授業スタイルへの疑問を投げかけるに至っている。このことは、受講者自身が実際に自分で授業設計から体験したことによって、授業といういとなみそのものへと目を向け、再考し始め

たことの好例といえるであろう。

しかしながら、全体をとしてみると、「ビデオやスケッチブックを見て、授業を振り返り…」との指示を出したにもかかわらず、本コースでの経験が、実際に自分にどのような影響を与えたのかについて、具体的に触れた者はわずかである。3日間の経験よりは、むしろ学校教育において自分たちがこれまでに経験したことについての言及したり、あるいは、理想化されたステレオタイプの教師像や授業像を描いたりするにとどまっている。3日間をととして学んだことが、これまでの学校での経験や、自分が描く理想に、どのように結びつくのかについてのより深い考察がほしかった。振り返りの重要性について、スタッフの側から、より明示的な説明が必要であったように思われる。

6. まとめと考察 ―高校生にとって「教える」を経験する意味―

本稿のまとめとして、このコースに参加した高校生に、この3日間のワークショップがもたらした意味について考察したい。

コースの受講者にとっては、高校生として「学ぶ」立場にあることが日常であり、今回の3日間の「教える」立場は非日常である。教師の仕事の裏側をかいま見て、再び「学ぶ」立場の日常に戻っていくのである。

このコースを通して、各受講者は、日常としての「学ぶ」経験を振り返り、協働しながら「教える」経験を作り出していった。各コースの活動からもわかるように、限られた時間の中で、自分たちなりに様々な工夫をこらし、オリジナルな授業を創造していった。こうした場を提供することができたという点で、所与の目的は達せられたと判断できよう。日常では得られない、非日常ならではの経験として、今回の経験は際だつこととなる。

ただし、われわれの意図は、「学ぶ」と「教える」を分離することにあるのではない。むしろ、「学ぶ」から「教える」へと、できるだけ連続させることを重視している。そのために、コースの早い時期に「学ぶ」立場から授業の経験を振り返らせる機会を設け、そこを「教える」立場になる基点とした。「学ぶ」立場からの授業の振り返りにおける受講者の記述や発言からは、日頃から学習者として、授業者の様子を実によく観察していることがうかがわれる。すでにコースに参加する前の「学ぶ」立場の中に、「教える」という営みを評価の対象とし、あるべき授業のあり方に対して自分なりの意見をもっているのである。この意味では、受講前から、受講者はすでに、授業の研究者とでもよべる状態にある。このコースは、受講者がそれまで漠然ともっていた授業や教師についてのイメージを、意識化させ、顕在化させる機会となった。

さらに、実際に模擬授業として授業の設計や実施を行うことによって、こうした自分なりのイメージが、授業設計・実施の具体的手順や授業論などの知識と結びつき、実際にやってみることの難しさや、楽しさなどの感情とも結びついた。しかも、単に授業の目標が達成されるが目指されただけでなく、人と人が行き交い、それぞれが成長しあう場としての授業、すなわち「人間形成の場としての授業」が追求された。あくまでも受講者が教師役、生徒役を演じた模擬授業でありながらも、現実のひとつの世界としてダイナミックに「教える」、「学ぶ」が展開されたといえる。